3. 成果と課題

3-1 海外研修を終えて

（１） 参加者から JICA への提言・感想

① 事前研修について

・もう少し早くインドネシアでの情報が欲しかった。

・機内預かり荷物の重量条件について、事前にはっきりとさせ、個人個人が厳守するよう事前研修で明言してほしい。

② 海外研修について

・個人では実施できない貴重な経験に感謝。今後もぜひ実施継続希望を希望する。

・１０日間気持ちよく、団体行動ができる今回の人選は素晴らしかった。今後も選考時には、本年度同様、個性の中にも協調性ある人選を希望する。

・同行職員について、２人とも冷静かつ旅行運営が円滑で助かった。

・来年度以降の通訳、ドライバーの人選について、本年度同様、安全かつすぐれた人柄の持ち主の人選を希望する。

・一人部屋を確保してほしい。

・教材収集とそれらの運搬費用の補助について予算化を希望する。

・日本文化紹介で使用する物品について、個人負担が大きかったので予算化を希望する。

③ 事後研修について

・ここで得られたつながりがずっと続いていけるよう、サポートをしていただければありがたい。

・海外研修の後「１１日と１２日の両日」を午後から固定で２日間、開けなくてはならなかったのはきつかった。せめて１日にまとめて欲しかった。

・帰国後のまとめの会や報告会の日程は、参加案内時には決定しておいてほしい。

・共有物、特に写真、ビデオ録画について費用の予算化を希望する。

（２） 参加者からの提言に対する回答

① 事前研修について

・海外研修の詳細について

　海外研修の詳細日程策定にあたっては、研修参加者の希望を取り入れながら訪問先との調整を行うため、詳細が決定するのは出発間近になってしまう。

　来年度は、参加者間の情報共有を行うメーリングリストを参加者決定直後に立ち上げ、海外研修の詳細日程が決定次第、事前研修として集合しなくてもメールを通じて日程などの情報共有ができるよう対策を検討する。

・機内預け荷物の重量制限について

　事前研修の時点で機内預け荷物の制限重量について明らかにし、重量超過した場合の対応（超過した個人が料金を支払うのか、全員で分担するのかなど）について参加者間で意見をまとめる時間を取るようにする。

② 海外研修について

・一人部屋の確保について

本年度は女性参加者数が奇数であったため、基本的に二人部屋での滞在となるところ、三人部屋での滞在になる参加者が出てしまい、体調管理にも悪影響を及ぼしたようである。

海外研修中の滞在費用は参加者負担であるため、来年度は事前に一部屋での滞在人数について参加者から要望を聞き、滞在費用の面で合意が得られれば柔軟に対応できるようにしたい。

・物品の購入費用や運搬費用の予算化について

本研修の実施規定上、派遣国に持ち込むか派遣国から持ち帰る教材の購入費や運搬費をJICAが負担することはできない。個人によって購入する物品の量も異なり、帰国後は購入者本人の所有物となるため、現地での交流または授業実践に係る個人的な出費と見なされる。

③ 事後研修について

・今後の支援について

本年度参加者だけではなく、過去の研修参加者も含めたネットワーク作りを検討中である。本研修の参加者は、兵庫県における開発教育・国際理解教育の推進者として中心的な役割を果たすことが期待されるため、今後も継続的に支援を行う。

・事後研修の日程について

事後研修（多文化共生のための国際理解教育・開発教育セミナー）の日程は、募集要項にも「必ず出席するべき事後研修」として明記されているため、この日程で参加可能なことを前提に応募していただいている。

・写真や動画の参加者間での共有にかかる費用の予算化について

写真や動画の共有は、参加者が授業実践に利用するために自発的に行うものであるため、各自による個人的な出費とみなされる。そのため、本研修の実施規定上からも JICA が負担することはできない。

（３） 教訓・提言（同行者から）

① ホームステイ・ホームビジットの実施（現地の人々との交流、現地での生活体験）

今回、安全確保を条件に青年海外協力隊員が語学訓練中に利用している家庭でのホームステイが実現した。また、都市部と村落部の違いを体験できるようにと、ゲシアン村でも昼食を現地の村人の家庭で共にとるというホームビジットもおこなった。その際、言葉や交流しやすいなどの面を考慮し、２人以上での訪問とした。参加教員にとっては、現地の人々との文化交流という点において、様々な生活を比較しながら実体験できたことは心に残る成果や収穫があったようだ。可能な限り今後とも実施したいプログラムである。

②学校への訪問・子どもたちとの交流

参加教員が海外研修に対して特に要望していたプログラム内容として、「学校訪問」があったこと、また、参加教員が良かった（期待に応えた）と感じたプログラム内容としても学校への訪問があげられる。やはり実際に訪問することで感じた日本の学校との共通点や相違点、現地の学校の運営体制、教育方針や問題点などについて質問を通して吸収し、さらに子どもたちとの交

流を通して得た経験は、帰国後、学校での授業実践を実施する上で大変有意義であったという意見が多く挙がった。地方や都会など様々な地域の学校訪問・交流は、参加教員にとって、教材や教育現場に活かすことができるため、今後の研修においても重点を置くべきプログラムである。

③青年海外協力隊員の活動現場への訪問

海外研修後、青年海外協力隊員の活動現場、実際の活動の様子をもう少し見たかったという意見も挙がった。参加教員が授業で生徒に現場のことを伝えるにあたり、やはり実際に自分の目で見て感じたことを伝える方がインパクトは強いため、今後も実際に活動している現場の視察を取り入れる方が良いと思われる。今回の中学校訪問に関しては、実際に隊員が授業をしている様子は見られなかったが、工夫し活動している様子が学校内の至る所に垣間見られたため、参加教員にとっては満足度の高い訪問であった。

バレーボールチームとの交流については、訪問前には「なぜ交流試合をするのか」と少し疑問の声もあったが、参加教員の中に体育教師がいたため交流からの学びも多かった。また、協力隊員からチームの現状についての説明もあり、いろいろな人とプレーすることでメンバーにとってもメリットとなるとのことを聞き、実施後の結果としてはお互い有意義な訪問となった。

④参加教員の要望を取り入れる

参加教員の要望に添った訪問先をプログラムにできる限り組み込む方向で今回も進めたが、来年以降もやはりこの方法が最良だと思われる。そうすることで教員の参加意欲は向上し、興味・関心のある研修内容はテーマを持った帰国後の授業にも活かしやすいと考える。

⑤社会問題・人権問題に関わる施設・NGO 活動現場の訪問

帰国後、参加教員が国際理解教育や人権教育などで社会問題について授業を行なう際、研修における社会問題・人権問題に関わる施設・NGO（草の根グループ）の活動現場を訪問することが効果的と思われる。例えば、今回のストリートチルドレン更生施設や、スラム街で活動しているNGO の活動現場、ゲシアン村への訪問は満足度が高く、彼らの活動から学んだことや実際に見て感じることのできたインドネシアの現状は、より強いメッセージ性やテーマを生徒に伝えることができるのではないか。こういった理由により、今後もぜひその国の社会性が現れるような NGO（草の根グループ）の訪問はプログラムに取り入れる方が良いと考える。

⑥訪問先を選んだ目的と訪問内容の把握

JICA プロジェクトの視察であれ NGO 活動現場の訪問であれ、何に重点を置くのか、目的意識をしっかり持った上で訪問先を決定し、お互いにとって学びのあるプログラムを考えることが望まれる。また、プロジェクトや訪問先の基本情報、各訪問先の選定理由などは事前に参加教員に提示するとともに、訪問側にもこちらの希望・興味などを事前に伝えるようにし、当日の司会・進行は誰が行なうのかなどの細かいスケジュールもお互いが把握しておくことが、参加教員及び訪問先の両者にとって実りある研修につながると考える。

⑦海外研修における大テーマの設定

今回は様々な分野が訪問先として組み込まれていたため、各自多様な角度から多くの学びを得

ることができた。一方で、海外研修自体の大テーマ（例えば、環境、日本とのつながり、多文化共生など）を設定することで、参加教員は参加する前からより目的意識を持ってそのテーマに取り組むことができ、帰国後も授業実践に活かしやすいという視点もあると考える。

しかし、訪問先の策定にあたっては相手（訪問先）の意向も考慮に入れる必要があるため、必ずしも思いどおりにいかないことも事実である。

⑧余裕を持ったプログラム（日程）の設定

開発途上国では、移動の時間は余裕を持って設定すべきである。今回、そのことを踏まえて時間の設定をしていたため、訪問先へ遅れるケースはほとんどなかった。ただし、参加教員の熱心な質疑応答や教材収集により、予定の時間よりも長引いたケースはあった。したがって、プログラムを決定する際は、交流時間も極力長めに設定するなどの配慮をし、プログラムの時間を設定する必要がある。

⑨現地での車両の手配

村など狭い道を通る訪問を考慮に入れ、今回も７人乗りの車両２台での移動となった。今回は携帯電話を JICA インドネシア事務所が２台傭上したことにより、訪問先への移動や車両間の連絡も円滑におこなうことができた。ただし、可能であれば１台の車両で移動する方が、振り返りや訪問先の情報の共有を行なうなど、移動時間を有効活用できるのではないだろうか。

⑩研修参加教員同士のつながり・地域への拡がり

本年度の教師海外研修参加教員同士のつながりを強化しつつ、過去の研修参加教員との交流やその際作成された資料の共有などは、今後参加教員が授業実践をすすめていく上で大変有効であると考える。過去も含めた参加教員同士の交流や研修・意見交換会の機会を取り入れることが、今後の授業実践報告会へ向けての課題であると考える。

また、学内において授業実践の見学を他教員へ勧めたり、地域で実践を発表するなど、担当クラスだけでなく学校全体、ひいては、地域全体へ成果が拡がるように支援していくことも必要と思われる。

3-2 授業実践を終えて

（１）授業実践の現状

参加教員は、８月に帰国後、２月まで各担当教科で授業実践を行った。（各参加教員の授業実践の詳細については、「参考資料 1」を参照）

参加が決定するのが５月末であり、年間計画も進む中、各学校の管理職や同僚の理解を得ないまま授業実践の枠を確保するのは難しい。そのため、授業実践を行なう際、学校内部において公開授業とするなど、管理職・同僚の教員をまきこんでの授業を促した。今年度参加教員のメンバーにも声をかけ、可能な限り情報共有のため授業を公開していただいた。

その結果、公開が可能となった学校については全校を上げて教師海外研修の目的などの共通理解を進めるきっかけとなったが、すべての参加教員が行なえたわけではないので、今後の課題である。

（２）授業実践の提言

参加する前から、「自分が何のために行くのか」、参加教員は管理職及び同僚に伝えるようにすることが帰国後の授業実践につながると考える。

今年度授業で実践できなかったことは来年度へつなげ、実践したこともより深めていくために、JICA の開発教育支援事業プログラム（JICA 国際協力出前講座・JICA 兵庫訪問プログラム）をぜひ活用していただければと思う。

（３）研修参加経験者間のネットワーク作りの必要性

本研修を一過性のものに終わらせず、翌年度以降も開発教育・国際理解教育に取り組んでもらうためには、参加教員に対するフォローを継続して行なうことが必要である。

本年度参加者間であれば、情報共有のために開設したメーリングリストを通じて、今後もお互いの授業実践の現状や課題を把握し、JICA 側からも開発教育関連のセミナーやイベントの情報を随時提供することで、開発教育に対するモチベーションの維持を支援することができる。しかし、現在はこのネットワークが同じ年度の参加者間に留まっているため、過去の本研修参加者も含めて幅広くフォローできる体制を整える必要がある。

上記を達成するために、具体的には以下のような方法が考えられる。

① 過年度参加者に呼びかけ、同じ年度の参加者間に留まっているメーリングリストを過年度参加者も含めたものに拡大し、情報交換を図る。

② これまでの教師海外研修参加者が集まって、学校現場における開発教育実践の事例を共有したり、開発教育手法のスキルアップを行なえるような研修の場を定期的に設定する。

参加年度や派遣国は異なっても、同じ研修に参加したことをきっかけに開発教育の実践を続けている教員の好事例を共有することは、開発教育に対するモチベーションを維持するうえで非常に有効であると同時に、各教員の授業実践のレベルを上げるうえでも効果的であると考える。

過去の参加者間をつなぐ試みはこれまでなされていなかったので、来年度の実現に向けて検討を進めたい。